

長草立根古窯跡群

範圍確認調査報告書

1991

大府市教育委員会

ご 案 内

・『長草立根古窯群範囲確認調査報告書』（平成4年3月刊行）の発刊後に、長草町立根地区から新たに4つの遺跡が発見され、この報告書の遺跡と区別するために遺跡名称を変更しました。本文中にある「立根古窯」は、すべて「立根A古窯」と読み替えて下さい。

・「立根B古窯」「立根C古窯」については、平成29年3月刊行の文化財調査報告書第12集『市内遺跡調査報告書－平成7～27年度の試掘調査・立会調査報告－』に掲載しています。

平成29年4月1日

序

急速な都市化への進展により、市の趣は日刻々とその様子を変化させつつある中で、我々の先人達の残した貴重な文化遺産は存続させてゆかなければなりません。

近年、本市においても各種のプロジェクトによる変容は言うに及びません。その中で失なわれていく文化財の保護を積極的に推進していく義務があることを痛感しています。

今回、長草町内に残る中世の古窯跡を地元有志の要望にこたえて、調査しました。この結果、四基の窯跡と多くの山茶碗・小皿等の遺物を採集することができました。しかし、この調査は範囲確認という予備的なものであり、今後の本格的な発掘調査が待たれるところであります。

本書はその調査報告でもあり、市民各位のご活用をお願い致します。

なお、調査ならびに執筆していただいた立松宏氏をはじめとする方がた、並びに調査に対し快諾いただいた地主の方に深く感謝の意を表します。

平成4年3月

大府市教育委員会

教育長 浅田 勇

例 言

1. 本書は大府市長草町立根2番地の153所在、長草立根古窯跡群についての、遺跡範囲確認調査の記録である。

2. 調査期間

平成3年11月12日～11月14日

3. 調査体制

- ① 調査主体 大府市教育委員会
- ② 調査主任 立松 宏 (半田市立博物館長・日本考古学協会員)
- ③ 調査員 山本 恭弘 (半田市立博物館)
近藤 英正 (“ ”)
- ④ 調査事務 深谷 修平 (大府市歴史民俗資料館長)
古田 功治 (大府市歴史民俗資料館主事)
- ⑤ 調査協力 三好 信一 廣瀬 鋼標 加古 鉄雄 浅見多喜子
古賀 ふみ 古山よし子 仲道ヤス子 富安 亘
岩月 輝夫 坂田 義治 小島 鈴子 加古千恵子
外園 範行 近藤 哲子

以上(社)大府市シルバー人材センター会員

4. 出土遺物は大府市歴史民俗資料館で保管されている。

5. 本報告書の実測図作成ならびに原稿執筆は近藤英正が当たった。但し小結のみは調査団長立松宏の執筆にかかるものである。

目 次

1.	位置・地形・地質	1
2.	調査の経過	4
3.	遺 構	5
4.	遺 物	9
5.	小 結	16

〈 挿 図 ・ 図 版 目 次 〉

挿図 1 長草立根古窯跡群分布位置図 (1)	1	図版 5 第2号窯床面下施設	20
“ 2 長草立根古窯跡群分布位置図 (2)	2	“ 6 第3号窯	20
“ 3 長草立根古窯跡群地形測量図	3	“ 7 第4号窯	21
“ 4 長草立根第2号窯・3号窯実測図	7	“ 8 第1トレンチ全景	21
“ 5 第1トレンチ実測図	7	“ 9 第1トレンチ ピット	21
“ 6 第2～第4トレンチ実測図	8	“ 10 第1トレンチA地点	22
“ 7 第1トレンチA地点 出土遺物実測図	12	“ 11 第1トレンチB地点	22
“ 8 第1トレンチB地点 出土遺物実測図	13	“ 12 第1トレンチC地点	22
“ 9 第1トレンチC地点 出土遺物実測図	14	“ 13 第1トレンチD地点	22
“ 10 第1トレンチD地点 出土遺物実測図	15	“ 14 第2トレンチ	23
図版 1 長草立根古窯跡群全景	18	“ 15 第3トレンチ	23
“ 2 第1号窯	18	“ 16 第4トレンチ	23
“ 3 第2号窯・第3号窯全景	19	“ 17 第1トレンチA地点 出土遺物	24
“ 4 第2号窯	19	“ 18 第1トレンチB地点 出土遺物	25
		“ 19 第1トレンチC地点 出土遺物	26
		“ 20 第1トレンチD地点 出土遺物	27
		“ 21 第2号窯窯体床面下出土遺物	27

1. 位置・地形・地質

大府市は知多半島の基部に位置する。丘陵は市内中央部より東西に二分され、東部丘陵は高さ40～50mでやや急な斜面をもつものに対して、西部丘陵は高さ40m程度のゆるやかな傾斜のものが多い。また東部丘陵には礫が多いのに対して、西部丘陵はシルトや砂が多い。長草立根古窯跡群は、この西部丘陵に立地している。

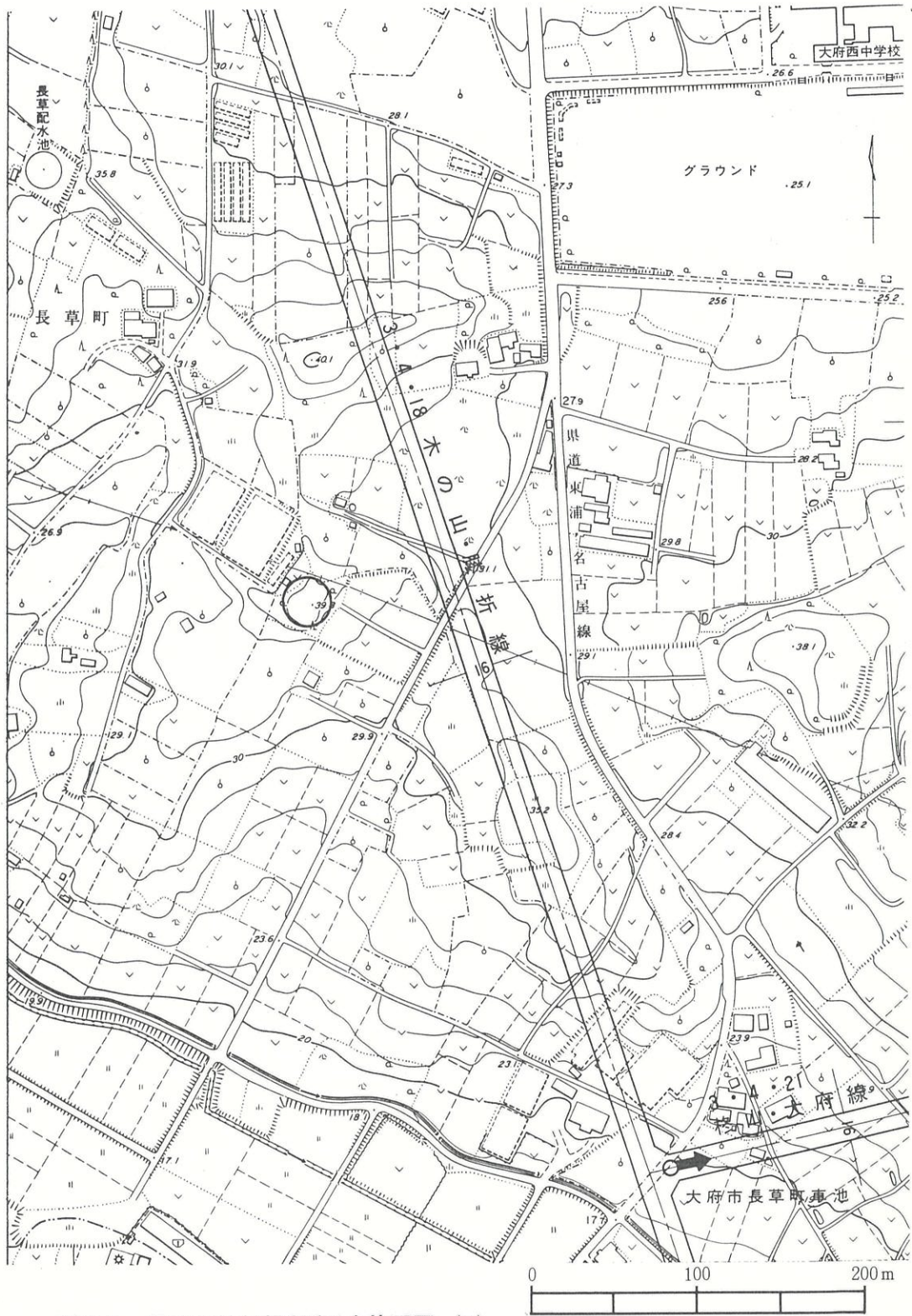
長草天神社前の交差点から県道東浦・名古屋線を南へ行き、大府西中学校グランド横を過ぎて右へ入る。この道を170mほど進み、さらに農道を右折したところに、長草立根古窯跡群は位置している。

この古窯跡群のある微高性の丘陵は、広さが南北に約30m、東西に約40mの不等辺三角形を呈している。標高は海拔40mを頂点に海拔35mまでの地点にあり、丘陵の東と南にはキャベツ畑が、北にはミカン畑がゆるやかに広がり、西はビニールハウスのためにほぼ垂直に切り取られている。窯体は丘陵の西側に3基、南側に1基あり、東へ焚き口を向けて築窯されているが、いずれも焼成室上半をビニールハウス建設のために欠いている。

ここから南西に約3kmの地点に吉田第1号窯・第2号窯がある。



挿図1 長草立根古窯跡群分布位置図 (1)



挿図2 長草立根古窯跡群分布位置図 (2)

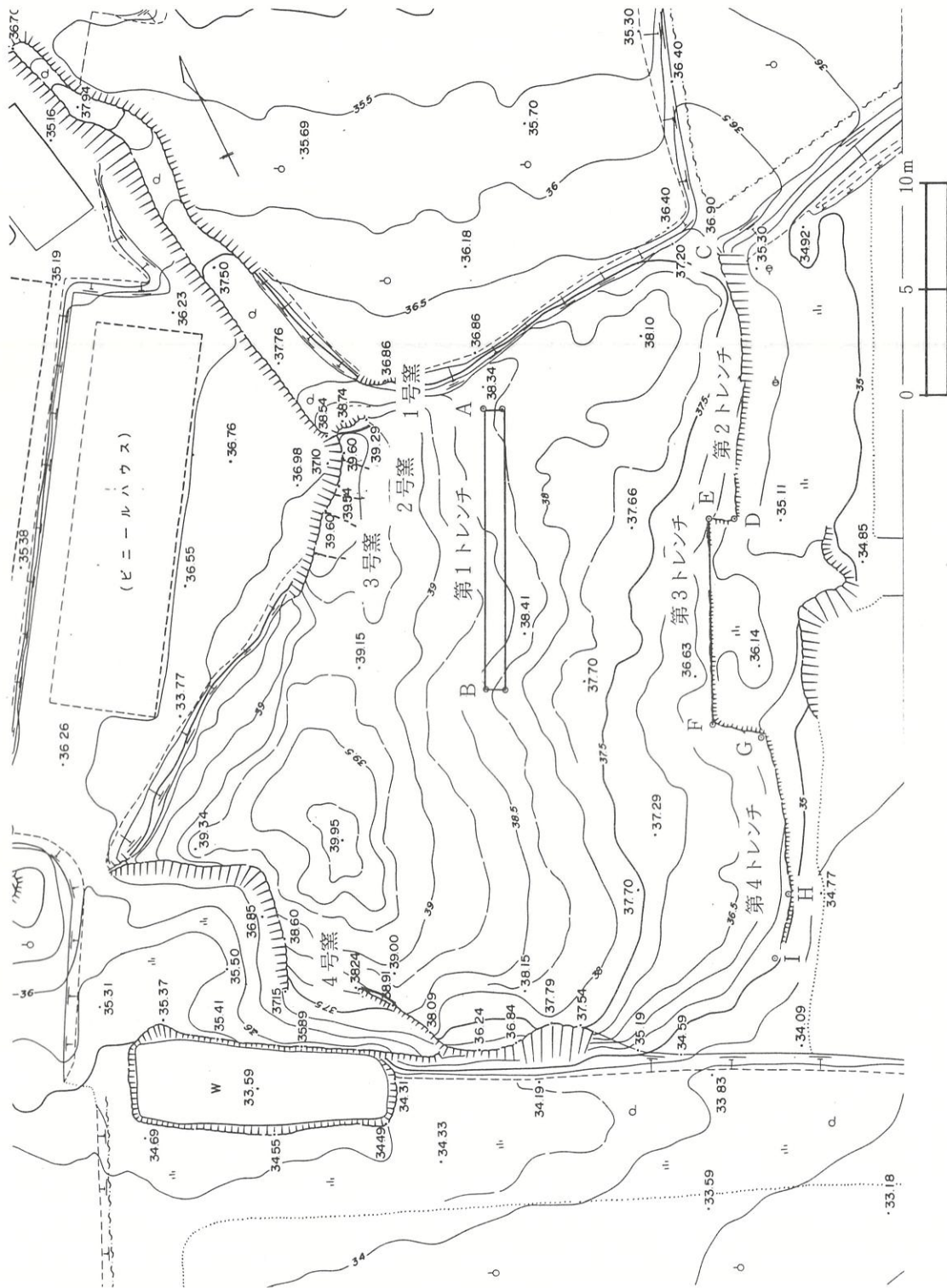


插图3 長草立根古窯跡群地形測量図

2. 調査の経過

大府市長草町は、町の歴史を調査するために、土地の所有者である加古庄司氏の協力を得て、平成元年7月に発見された長草立根古窯跡群の範囲確認調査を行なうことになった。今回の調査は平成3年11月12日から14日までの3日間行なわれた。

11月12日 (火) 晴れ 午前9時30分に現地に集合。まず立松宏氏より調査協力をお願いした大府市シルバー人材センター会員の方々に調査の説明を行なう。その後、あらかじめ伐採されている現地から遺物を表土採集する。その間に丘陵斜面上部にトレンチを設定する。(第1トレンチとする)。表採が終了するとトレンチを掘り始めるが、表土に樹木の根がかなり張っており、作業は難行する。この間に、平成2年8月に行なわれた現地踏査で発見した、丘陵西側断面に露出している2基の窯体を確認する。

午後、第1トレンチは表土が取れると作業が容易になる。一方午前中に確認した2基の窯体の北側から窯体側壁が見つかる。そこで丘陵の北側から1号窯・2号窯・3号窯とする。また丘陵の南側斜面にも窯体の一部が発見され、4号窯とする。第1トレンチは掘り進めるうちに、ほぼ全体に渡って遺物が出土しはじめる。そのためトレンチの北からほぼ4等分する形でA地点・B地点・C地点・D地点として遺物を分ける。出土したのは山茶碗と山皿のみである。これと平行して丘陵西側断面の実測図作成作業に入る。断面はかなり苔に覆われているため、これらを取り除く。2号窯・3号窯ともに焼成室中央部付近と思われるが、2号窯からは焼成室床面下から遺物も確認された。

11月13日 (水) 晴れ 午前は前日に続き第1トレンチの発掘作業を行なう。多いところでは表土から30～40cm下から山茶碗・山皿が出土する。またこれらとともに、焼台もかなり多く混入している。平行して丘陵西側断面にみられる2号窯・3号窯の断面図を作成する。

午後、第1トレンチはほぼ発掘が完了する。丘陵東側傾面の下部に一部灰原がみられるので、第2・第3・第4トレンチを設定し、発掘作業に入る。これと平行して第1トレンチの断面図及び平面図を作成する。第3トレンチの灰原部分から焼台が出土するが、山茶碗等は少なく、またほとんどが実測不可能なものばかりであった。

11月14日 (木) くもり 午前中は第2～第4トレンチの発掘作業を進める。第1トレンチは写真撮影が終了しだい、埋め戻しにかかる。その間、第2～第4トレンチの実測作業に入る。

午後、第2～第4トレンチの実測が終了したところで埋め戻しを行ない、長草立根古窯跡群の範囲確認調査は終了した。

3. 遺 構

第1号窯

丘陵の北部に床面及び側壁の一部が残存するのみである。形状からみると焼成室下部あたりであろうと思われる。

第2号窯

丘陵の西側断面に床面と側壁が露出している。形状からみると焼成室中央部あたりと思われる。床面の巾は2.1 m、側壁は南側が立ちあがり50 cm、北側が80 cm残存しているが、北側は40 cmのところまで折れて窯内に落ち込んでいる。床面の厚さは約10 cmあるが、その下約10 cmの位置に伏せた山茶碗が8個体並んでいる。これは窯内の焼成温度を高く保ったり、地下水等の排水のための施設と考えられる。

第3号窯

第2号窯と同様丘陵の西側断面、第2号窯から1.3 m南側に位置し、床面と側壁が露出している。床面の巾は約2 mあり、これも焼成室中央部分あたりと思われる。また側壁も南側で約20 cm、北側で約30 cm残存しており、窯内に側壁の落ち込みもみられる。床面の厚さは約5～10 cmである。

第4号窯

丘陵の南側斜面、第3号窯から南へ約23 mの地点に床面の一部が露出しているが、どの部分かは不明である。

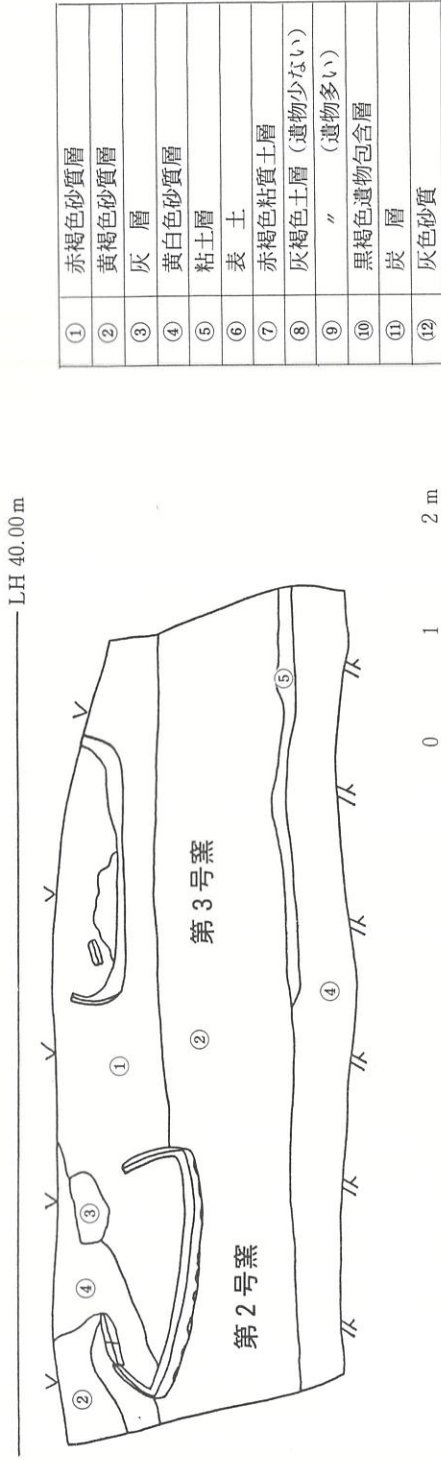
第1トレンチ

第1トレンチは丘陵西側断面の北側から約7 mの地点に、ほぼ南北に長さ12.5 mとして設定した。表土は樹木の根がかなり張っていたが、厚さは約10～20 cmで、その下は赤褐色土層が約20～50 cmの厚さで分布し、次に遺物包含層が続いている。遺物は山茶碗と山皿でトレンチの北側と南側からかなり多量に出土した。またこれらに混って焼台や側壁の破片も多く出土している。第1トレンチ北側から約3 mの地点からピットの一部が検出された。検出された部分での大きさは約40 cm、深さは20 cmである。またこのピットから南へ約

2 mの地点からは溝が検出された。詳しいことは全面発掘をしないと不明であるが、前庭部下部から灰原に続く地点であろうかと思われる。

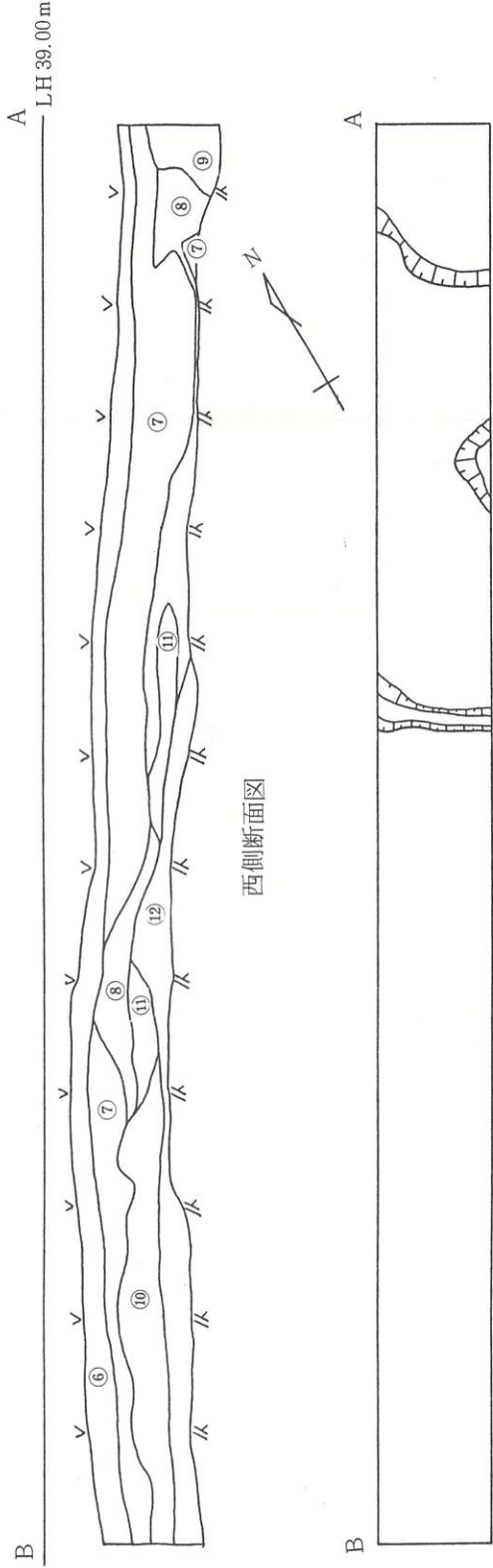
第2～第4 トレンチ

第1 トレンチから東へ約10 m、丘陵の下部に地形に沿って第2～第4 トレンチを設定した。第2 トレンチは長さ約11 m、第3 トレンチは長さ約9 m、第4 トレンチは長さ約11 mである。第2～第4 トレンチとも黒色砂質層が一部にみられ、灰原の末端ではないかと思われる。特に第3 トレンチ中央部分には巾約2 m、厚さは最大30 cmにわたり焼台が層をなしており、灰原末端部の様相を呈している。



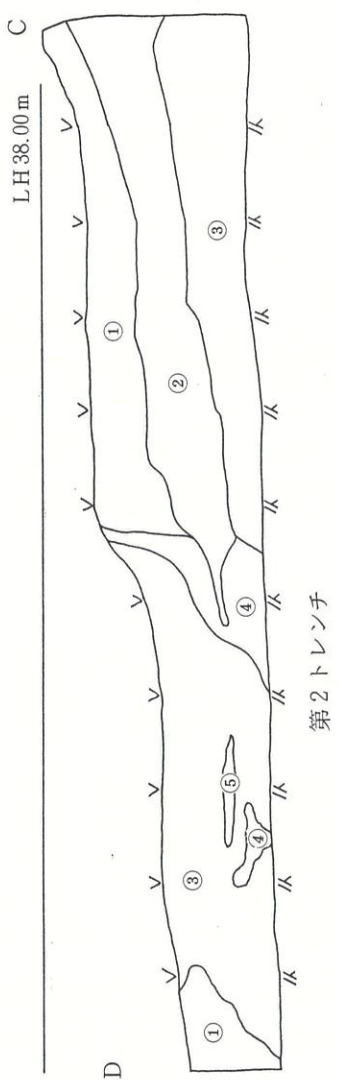
挿図4 長草立根第2号窯・3号窯実測図

①	赤褐色砂質層
②	黄褐色砂質層
③	灰層
④	黄白色砂質層
⑤	粘土層
⑥	表土
⑦	赤褐色粘質土層
⑧	灰褐色粘質土層 (遺物少ない)
⑨	” (遺物多い)
⑩	黒褐色遺物包含層
⑪	炭層
⑫	灰色砂質

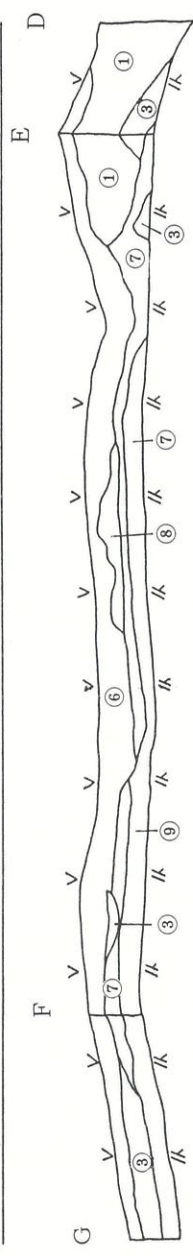


挿図5 第1トレンチ実測図

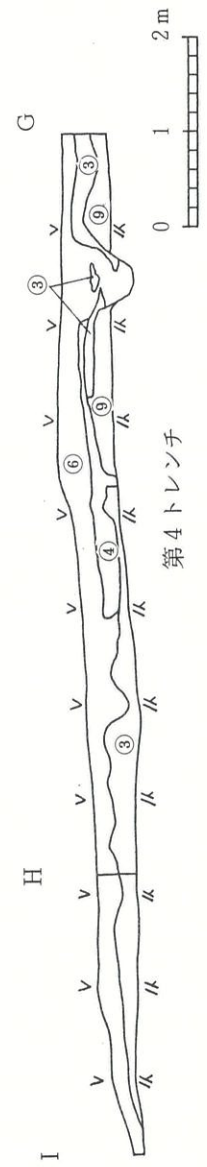
平面図



LH37.50 m



LH37.00 m



①	黄褐色土層
②	灰褐色粘質土層
③	赤褐色粘質土層
④	黒色砂質土層
⑤	灰白色粘土層
⑥	黒褐色砂質土層
⑦	灰黒色砂質土層
⑧	焼台
⑨	灰黄色砂質土層

挿図6 第2～第4トレンチ実測図

4. 遺 物

遺物はほとんどが第1トレンチからの出土である。出土遺物は山皿と山茶碗のみである。量はコンテナ箱に約15箱分出土した。遺物は第1トレンチの北からA地点・B地点・C地点・D地点と分けたが、これはあくまで便宜上4地点に分けただけである。器形についてみると、特に山皿ではA・B地点から出土したものはすべて高台はない。D地点から出土したものはすべてに高台がある。またC地点から出土したものは高台を有している割合がかなり高いが、これはB地点のものが含まれていると考えられる。第1トレンチの断面図をみると、厚みの差はあるもののほぼ全体にわたって黒色や黒褐色の遺物包含層が分布しており、現在確認されている第1号窯から第3号窯のどの窯体の灰原部分に相当するのかは、今後の全面発掘をまたない限り不明である。

山 皿

山皿はA～D地点出土の全体について、底部から口縁部に至る体部の形態によって、次の4種類に分類した。

- I類……底部からほぼ直線的に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。あるいは口縁部で僅かに外反するもの。
- II類……底部からやや丸身をもって立ち上がり、そのまま口縁部に至る。あるいは口縁部で僅かに外反するもの。
- III類……底部からやや丸身をもって立ち上がり、体部で数本の稜線を形成しつつ口縁部に至るもの。
- IV類……底部から絞って立ち上がり、体部中位で稜線を形成し、そのまま口縁部に開いていくもの。

A地点はI類(図7-1~4) II類(図7-5) III類(図7-6) IV類(図7-7~8)となっており、口径は8cm前後、底径4.5cm前後、器高2.0~2.3cmのものが多い。高台を有するものは1つもなく、器壁は灰白色でかなり粗悪な作りになっている。

B地点はI類(図8-1~6) II類(図8-7~19) IV類(図8-20~23)であり、III類はみられなかった。口径は8cm前後、底径4cm前後、器高1.9~2.3cmのものが多い。高台を有するものは1つもなく、器壁は灰白色か灰黒色でかなり粗悪なものが多く、形状

的にはA地点出土の山皿との差異はみられない。

C地点はⅠ類(図9—1~6)Ⅱ類(図9—7~20)Ⅲ類(図9—21~22)Ⅳ類(図9—23~24)となっている。ほとんどが高台を有しているが、4点は高台がない。口径は8.6~9.2cm、底径は4.4~5.0cm、器高は2.5~3.0cmのものが多く、器壁は灰白色でかなり丁寧な作りのものが多くみられる。高台にはすべて靱穀圧痕が認められる。

D地点はⅠ類(図10—1~3)Ⅱ類(図10—4~11)Ⅳ類(図10—12)であり、Ⅲ類はみられない。口径は8.6~9.2cm、底径は4.4~5.2cm、器高は2.6~3.2cmのものが多く、すべてに高台を有しており、ほとんどの例に靱穀圧痕が認められる。器壁は灰白色が多くかなり丁寧な作りのものが多い。

山 茶 碗

山茶碗はA~D地点出土の全体について、底部から口縁部に至る体部の形態によって次の4種類に分類した。

Ⅰ類……高台からほぼ直線的に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。あるいは口縁部で僅かに外反するもの。

Ⅱ類……高台からやや丸身をもって立ち上がり、そのまま口縁部に至る。あるいは口縁部で僅かに外反するもの。

Ⅲ類……高台からやや丸身をもって立ち上がり、体部中位で稜を形成しつつ口縁部に至る。あるいは口縁部で僅かに外反するもの。

Ⅳ類……高台からほぼ直線的に立ち上がり、体部で数本の稜線を形成しつつ口縁部に至るもの。

山茶碗には全て高台を有している。(1点のみ高台はないが、これは剥離したものである。)高台にはほとんど靱穀圧痕が認められる。また外底部には糸切り痕が残っている。

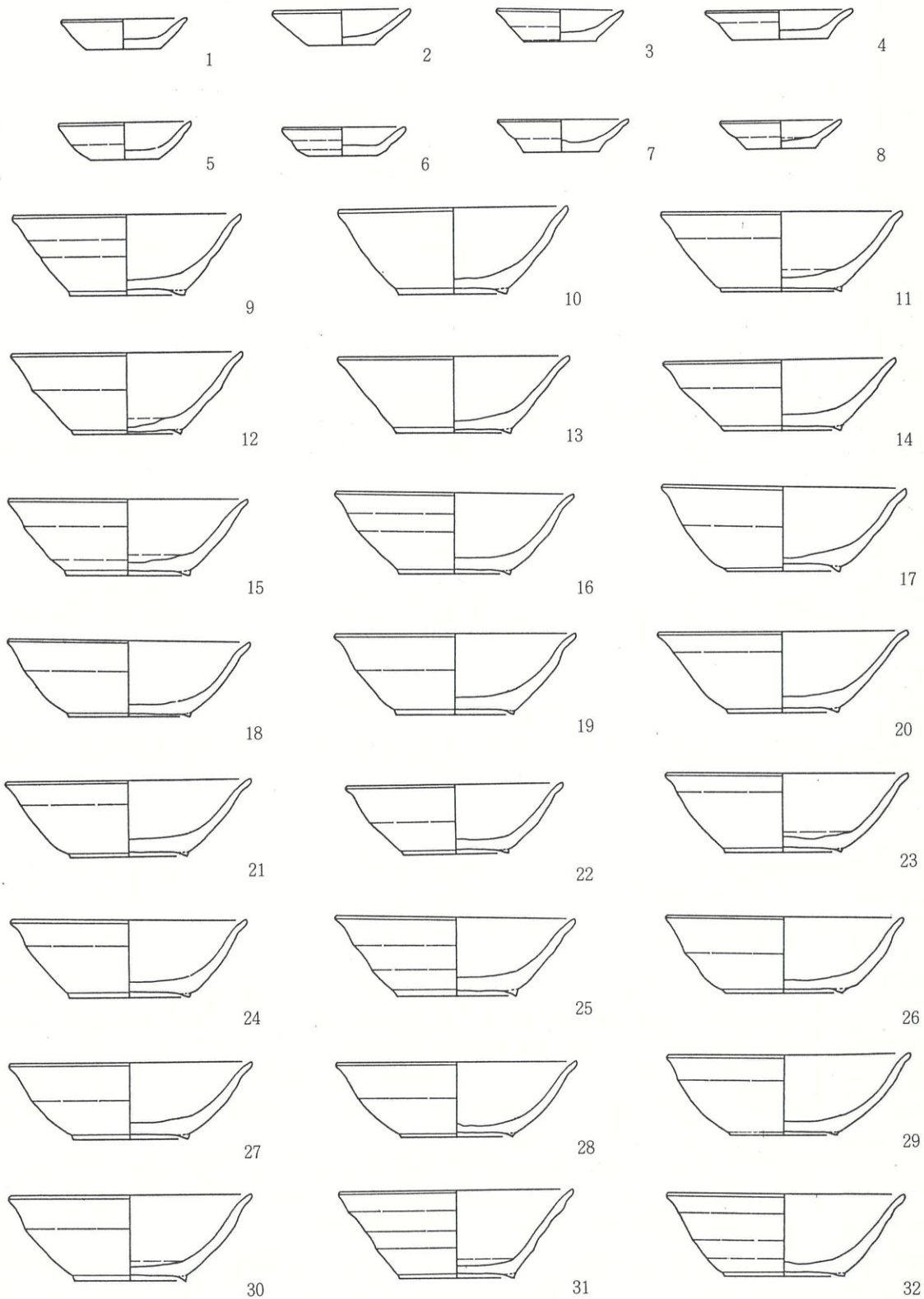
A地点はⅠ類(図7—9~14)Ⅱ類(図7—15~24)Ⅲ類(図7—25~30)Ⅳ類(図7—31~32)となっており、口径は14.6~15.6cm、高台径は7.0~7.8cm、器高4.9~5.4cmのものが多く、器壁はほとんど灰白色を呈し、胎土は砂質分が多く、表面に石英粒が吹き出しているものなど、かなり粗悪な作りになっている。

B地点はⅠ類(図8—24~29)Ⅱ類(図8—30~32)Ⅲ類(図8—33~36)Ⅳ類(図8—37~38)となっており、口径は15.0~16.2cm、高台径6.8~7.8cm、器高4.8~5.5cmのものが多く、器壁は灰白色と黒褐色を呈するものがあり、胎土は砂質分が多く、

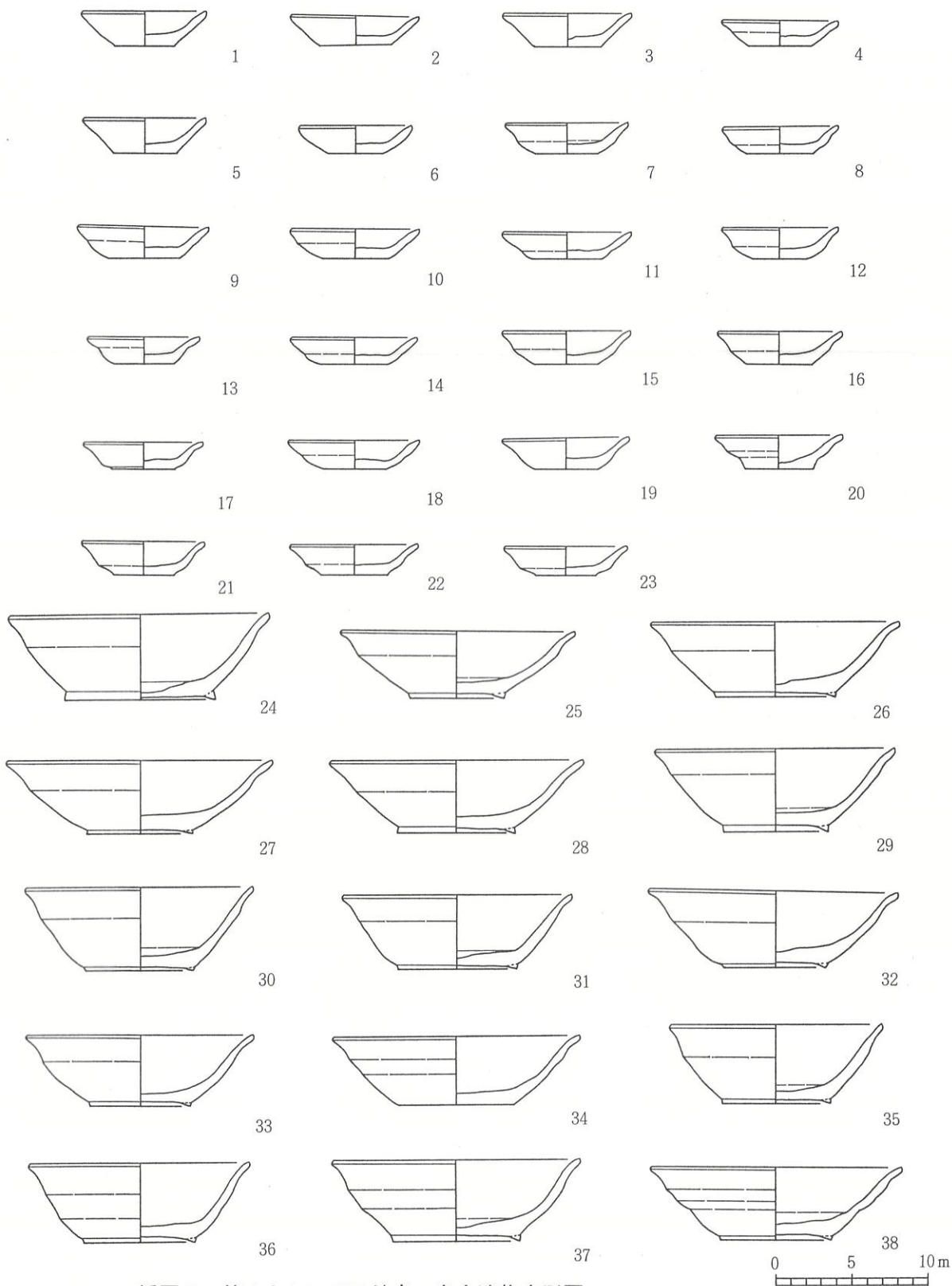
表面に石英粒が吹き出しているものなど、かなり粗悪な作りのものが多い。

C地点はⅠ類(図9—25~29)Ⅱ類(図9—30~34)Ⅲ類(図9—35~41)Ⅳ類(図9—42)となっており、口径は15.4~16.6cm、高台径は7.2~8.6cm、器高は5.0~5.6cmのものが多い。器壁はほとんど灰白色を呈し、胎土は砂質分の少ない粘土質の強い良質のもので、比較的に丁寧に仕上げられているものが多い。

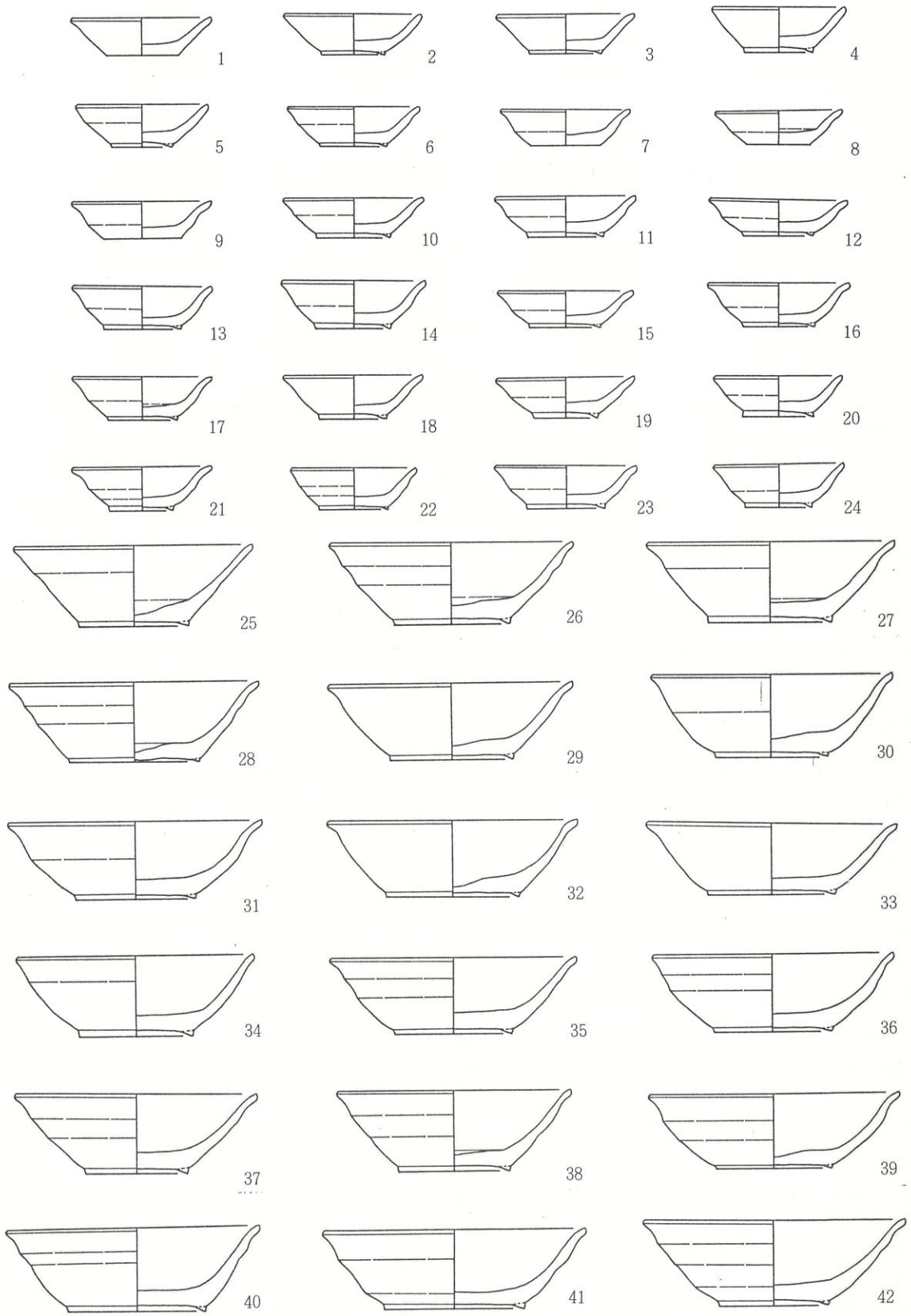
D地点はⅠ類(図10—13~17)Ⅱ類(図10—18~24)Ⅲ類(図10—25~33)でありⅣ類はみられない。口径は15.6~17.0cm、高台径は8.2~8.6cm、器高4.9~5.7cmのものが多い。器壁は灰白色か黒褐色が多く、胎土も粘土質の強い良質なもので比較的に丁寧に仕上げられているものが多い。



挿図7 第1トレンチA地点 出土遺物実測図

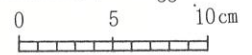
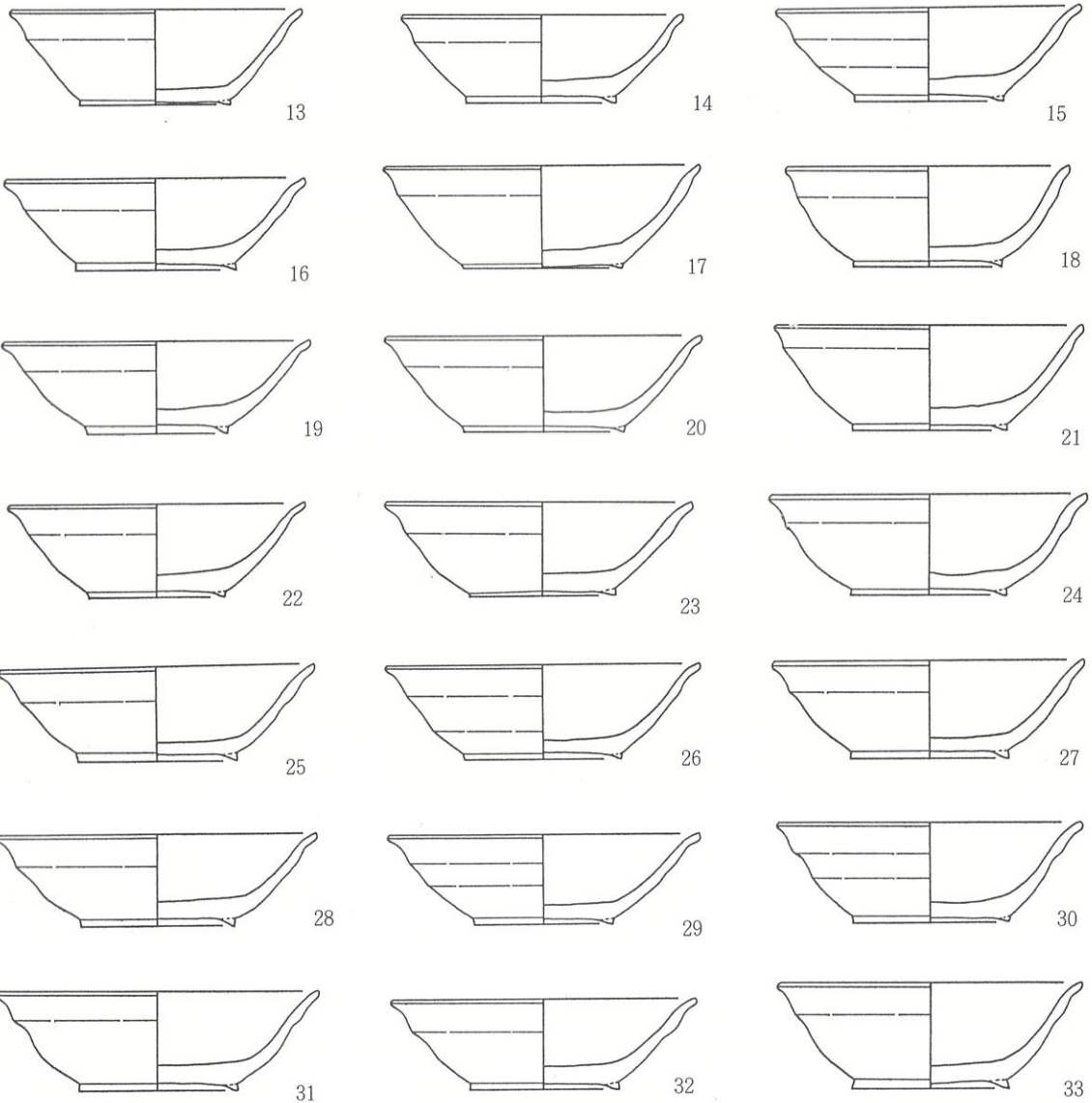
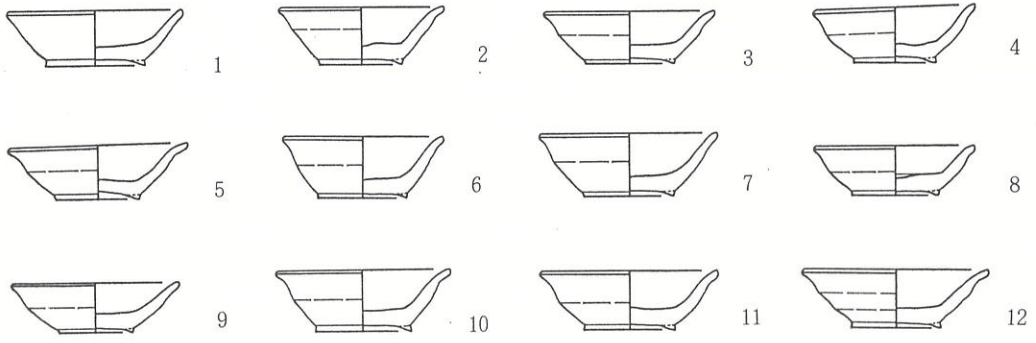


挿図8 第1トレンチB地点 出土遺物実測図



挿図9 第1トレンチC地点 出土遺物実測図

0 5 10cm



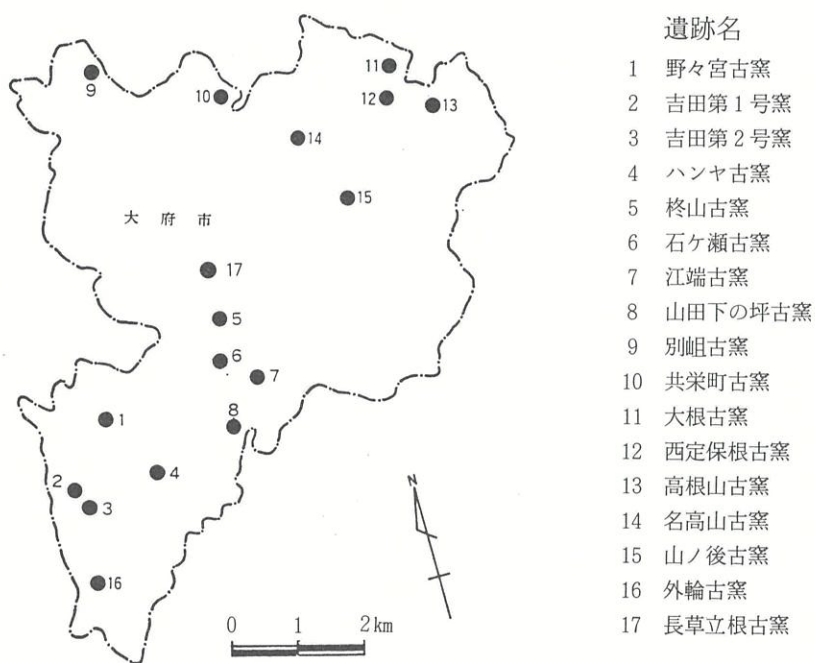
挿図10 第1トレンチD地点 出土遺物実測図

5. 小 結

大府市長草町立根2番地に立地する立根古窯跡群は、平成元年（1989）7月に大府西中学校の生徒によって発見され、その後大府市教育委員会文化財担当者らによって現地調査が実施されて、山茶碗の破片が採集されている。しかし現地は雑木が密生し、地表面が全く露呈していない状況で、古窯の基数を確認することすら困難であった。そこで今回地表を清掃し、より性格を把握するためにトレンチを設定、灰原の状況を確認することとした。まず、残存丘陵部の中央に、窯体の中心線と直交するようにその灰原部に第1トレンチをほぼ南北に設定、機械的に北端よりA、B、C、Dの4区に分けて遺物を採集した。トレンチに関係なく、清掃によって窯体が確認できた窯は4基で、北から1号窯2号窯3号窯4号窯と仮称することとした。

第1号窯

残存丘陵部の北西端に極く僅かに窯壁の一部と床面の一部を残すのみで、大部分は土取りによって削平されていた。壁面のカーブを延長すると、窯体は北方の密柑畑の中に入りており、灰原も完全に消滅していた。



大府市古窯群図

第2号窯

窯体に対してほぼ直角に近く上部が切断され、崖面に露呈していた。窯体の半分近くは残存している可能性がある。

第3号窯

第2号窯と雁行して築かれており、その状況は第2号窯と同一である。

第4号窯

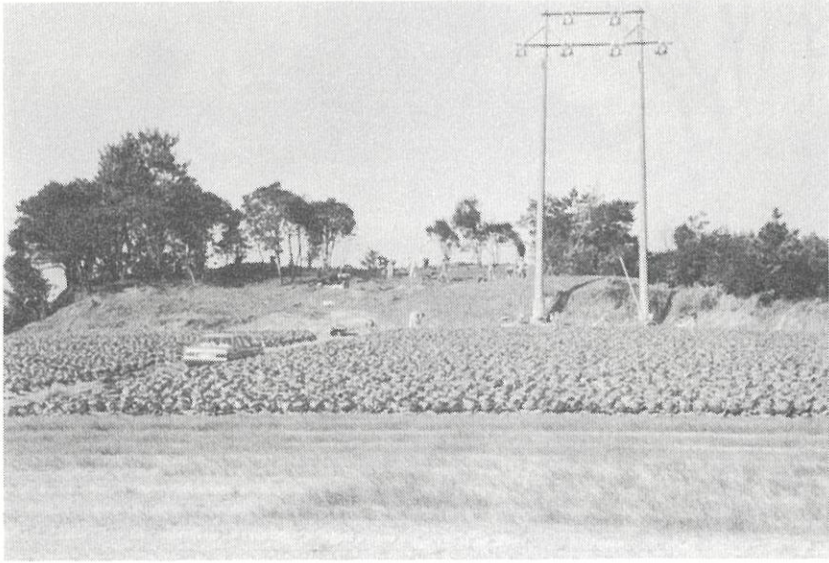
残存丘陵の南端に北側の窯壁と床面を僅かに残して南部の崖面上に貼りつくように残存しているが、第1号窯と同様にその灰原は南に振っており、土取りによって完全に消滅していた。

以上の結果から、第1トレンチ内の遺物は第2号窯、第3号窯のものと推定されるが、第3号窯と第4号窯との間にはかなりの空間があり、この間に更に1基が埋蔵されている可能性も否定できない。

さて、第1トレンチ内の土器はすべて山茶碗と山皿であるが、A区、B区はほぼ同一手法、D区はA区B区と全く異った手法で作られ、C区はその両者が混在した状況であった。D区を中心に出土した土器はその形状から知多地方行基焼編年上第1型式に属するものであり、吉田1号窯、吉田2号窯、高根山古窯などにその築窯年代が近いものである。絶対年代については今直ちに即断することは困難であるが、大府市誌本文篇中世の吉田1号窯吉田2号窯で詳述したように、12世紀に置くことができる。これらの遺物は第3号窯に比定されるものである。

これに比べて、A区、B区とC区の一部の土器は、すでに山皿の高台が省略され、D区に対して年代の降るものであって、知多半島行基焼編年上第2型式に属するものである。これら第2号窯に比定される土器は12世紀末から13世紀にかけてのものと考えられるが、第3号窯と同じく即断は避けたい。

現在まで、大府市域で知られている古窯は別図の通りであるが、高根山古窯が3基、名高山古窯が2基で群を成している外は、すべて単独で築窯されているようである。甕窯が全くないという現状とあわせて、大府市域の古窯の特色をどう捉えたらよいか、今後の問題であろう。



図版1 長草立根古窯跡群全景



図版2 第1号窯



图版3 第2号窯・第3号窯全景



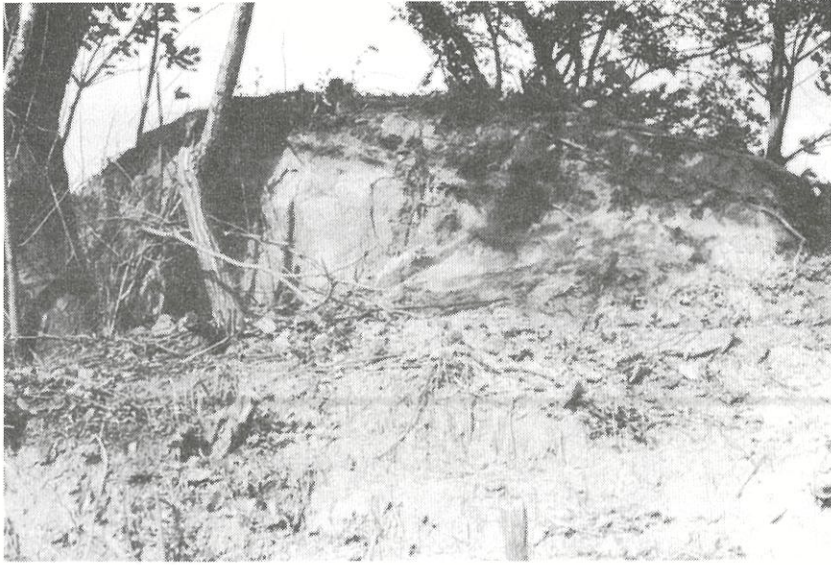
图版4 第2号窯



图版 5 第 2 号窑床面下施設



图版 6 第 3 号窑



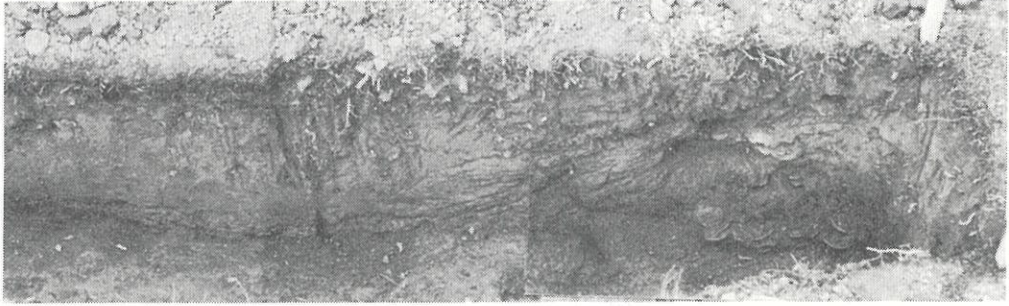
図版7 第4号窯



図版8 第1トレンチ全景



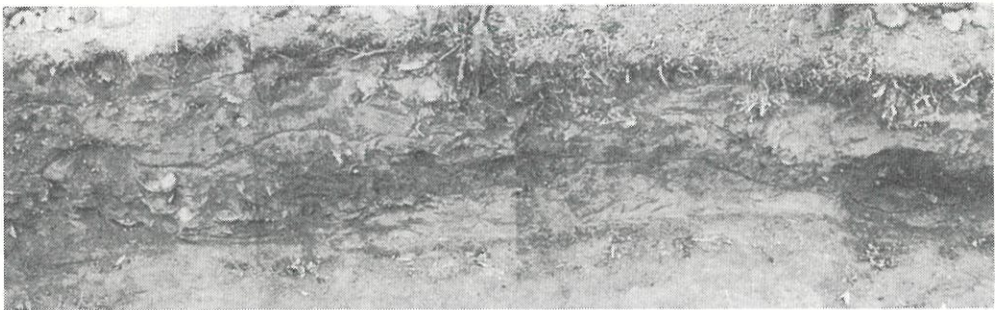
図版9 第1トレンチ ピット



図版 10 第 1 トレンチ A地点



図版 11 第 1 トレンチ B地点



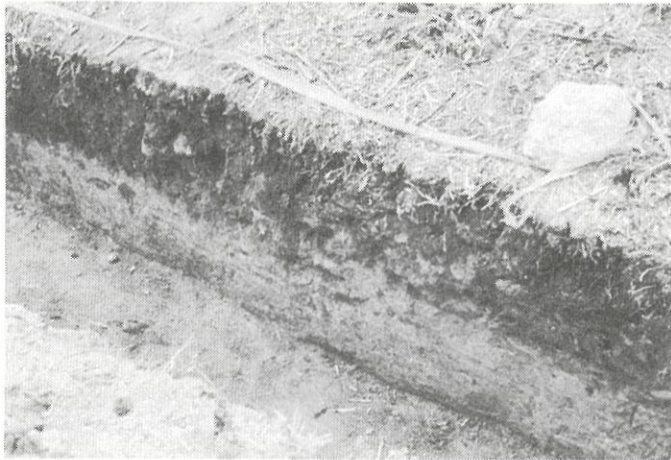
図版 12 第 1 トレンチ C地点



図版 13 第 1 トレンチ D地点



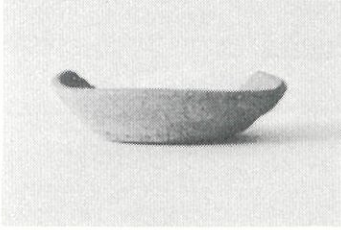
図版 14 第 2 トレンチ



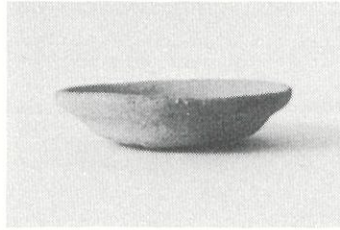
図版 15 第 3 トレンチ



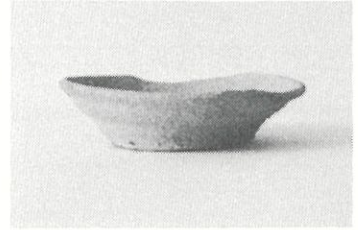
図版 16 第 4 トレンチ



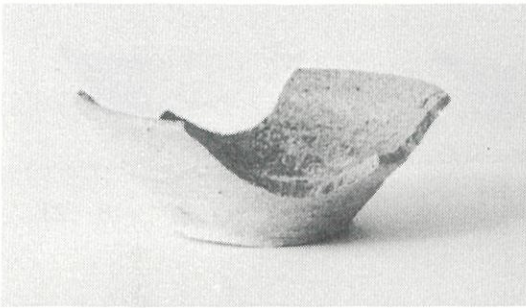
7-1



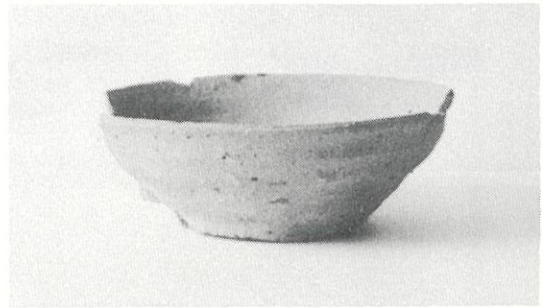
7-6



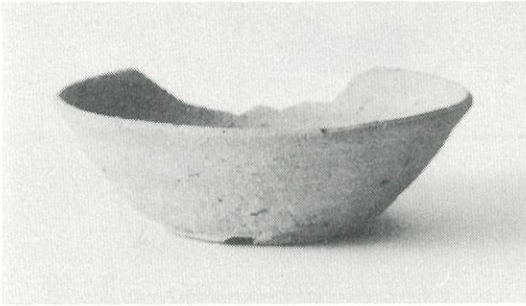
7-7



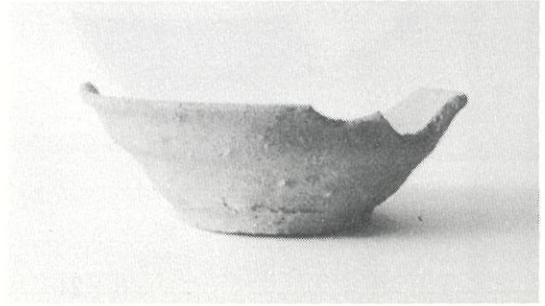
7-12



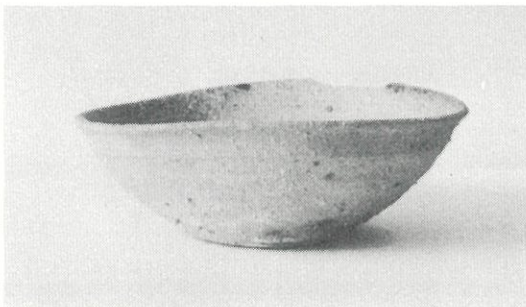
7-19



7-18



7-25



7-29



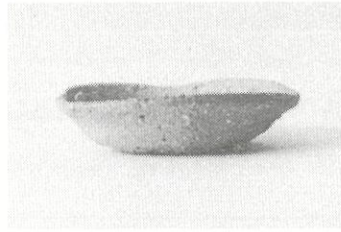
7-30

(番号は挿図番号を示す。例7-1は挿図7の1)

図版17 第1トレンチA地点 出土遺物



8-2



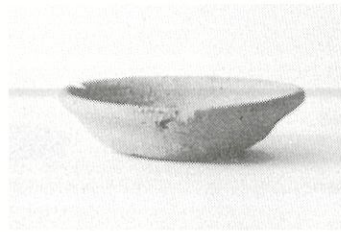
8-7



8-11



8-13



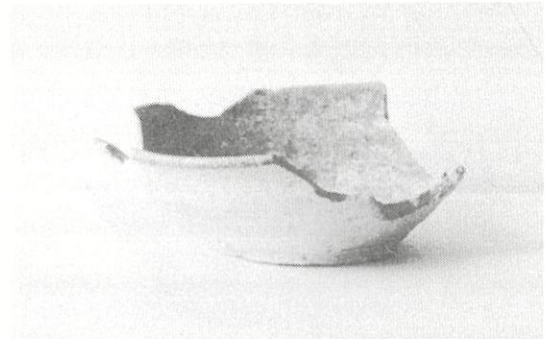
8-19



8-23



8-24



8-32



8-33



8-37

(番号は挿図番号を示す)

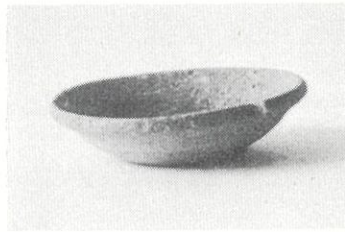
図版 18 第 1 トレンチ B 地点 出土遺物



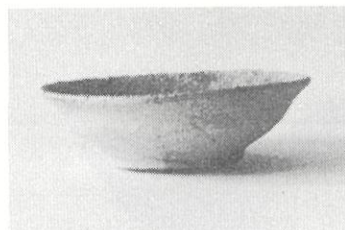
9-5



9-6



9-8



9-17



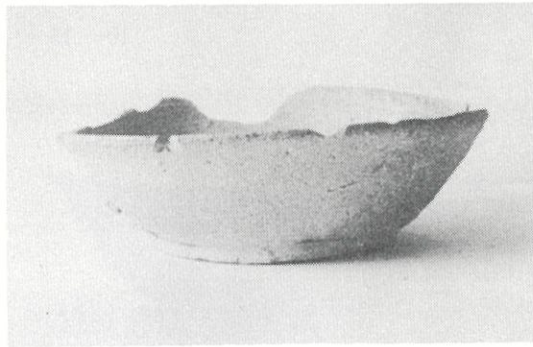
9-22



9-24



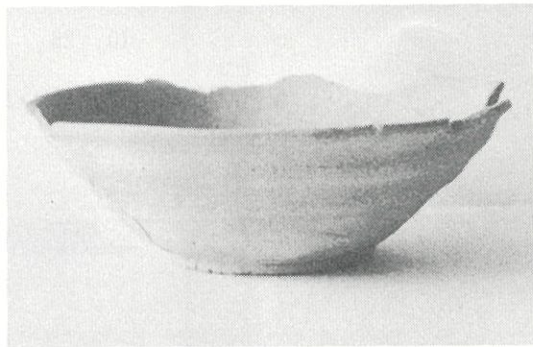
9-26



9-33



9-35



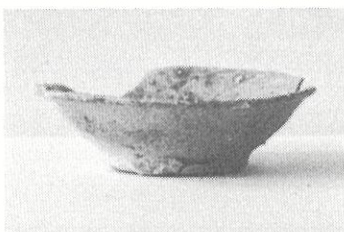
9-42

(番号は挿図番号を示す)

図版 19 第1トレンチC地点 出土遺物



10-1



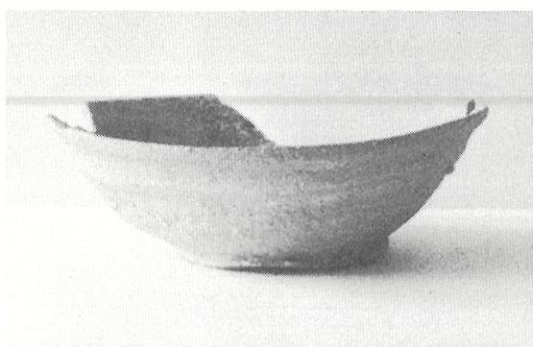
10-5



10-12



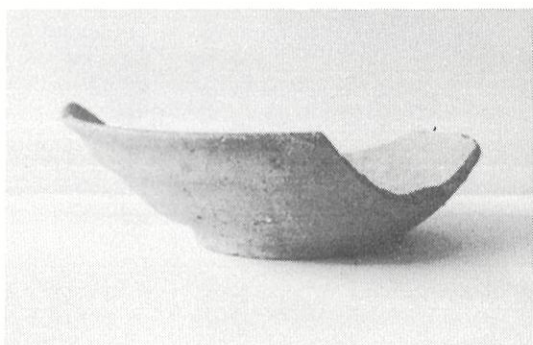
10-15



10-23



10-25



10-28

図版 20 第 1 トレンチ D 地点 出土遺物 (番号は挿図番号を示す)



図版 21 第 2 号窯窯体床面下出土遺物

長草立根古窯跡群

範囲確認調査報告書

平成4年3月発行

発行 大府市教育委員会

印刷 合資会社 教専社